

春日部福音自由教会 2020年8月9日 11時 敗戦記念礼拝(同時配信オンライン合同礼拝)
聖書 イザヤ書 40章 1節~3節
説教 「敗戦 75年の記憶を踏まえて」 高橋敏夫名誉牧師

I 敗戦 75年の節目に

今朝開かれている御言葉はイザヤ書 40章 1節から 3節でございます。“敗戦 75年の記憶を踏まえて”という説教題であります。戦争の記憶を風化させないために、私たちは毎年敗戦記念礼拝を守らせて頂いております。今朝共に敗戦 75年の記憶を踏まえて、新しく神のみことばに聞きたいと思えます。この 75年間は私にとって、また日本の教会にとって、また日本という国にとって一つの節目にあたります。「慰めよ、慰めよ、」という神の仰せを新たにお聞きしたいと存じます。

II 敗戦後の記憶

私の人生 80年を顧みます時に、知ってか知らずか、私自身が神様の御言葉を色々な姿で聞くことが許されていたと思えます。1945年、私の 5歳の時に長野県の安曇野というところに米軍機が本当に驚くほどの低空飛行をして、威圧的に私に、5歳の私に、お前の国は負けたんだ、戦争は終わったんだ、というメッセージを届けてくれました。6歳の時には米兵が数人、まあ 5、6人でしたね、刀狩に一軒一軒回って歩いておりました。土足で家々をめぐり、何か武器を見つけようとしていたようですけれども、それも単なるセレモニーというよりも、日本人に対する威圧行為であったように今思えます。小学校入学時にはもう周囲の家々には最低限のものしかなかったですね。入学する時に、学校に履いていく靴を持っている人もほとんどいなかったし、ランドセルなんかなかったですよ。物資は不足に不足していたことを小学生の私は覚えています。

そして安曇野の穂高町というところから私は豊島区高松 1丁目 8番地というところに移転することになりました。私が移転した場所は 3家族の同居でありました。そしてその家の前は山手通りが走っているんですが、空襲で焼け跡になっています。だから山手通りで三角ベースをして遊んだ記憶を私は、今では考えられないようなことを、覚えています。また焼け野原は子供の遊び場でした。鉄くずを集め、銅線を拾い、ガラス瓶を拾ってそれが売れたんですよ、すぐに。それが私どものお小遣いになってたんですよ。でもあるとき要町小学校の校長先生が、私本当によく覚えてます。「はしたないそういうことをして

はいけません」と叱られるように、朝礼の時に注意されて、それでみんなは、したいんだけどしなく、できなくなりましたね。もう要町というところから池袋の、この東武池袋というのは西武デパートのある方が東部で、東武デパートのある方が西部なんですよね、西口なんです。あれ逆になってるんですよ。でもその駅前通りは、いまはもう賑やかでしょう、でも焼け野原でした。もう、ドーンと駅まで見えるくらい、まあ坂がありますから見えはしないんですけど、そういう中で私の多感な時代は育ったんです。だから食べ物は配給なんですよ。お米なんてないんですよ。代用食というのがみんなの家庭で食べられていて。だからね、私たちの周りの人たちがこぞって同じ言葉、“腹いっぱい白いご飯が食べたい”ってというのがね、その当時のね、共通の合言葉のような時代でしたね。だから私は母からピーナッツを買ってもらった時に、一粒のピーナッツを食べたら、もうそれでおしまいですから、3等分にして、これ僕の気質なんです、ピーナッツを3等分するって想像つくでしょ、想像力のある人はね。全部3等分してから一つ一つ食べるという、そういう子供時代でした。台湾バナナをね、密かに食べさせられた時の味は今も忘れていません。その頃フィリピンからバナナが輸入されるなんて誰も考えてもいませんでしたよ。でね、家々ではみんな内職してました。していない家はほとんどなかったですね。だから友達の家遊びに行ったら、みんなおばさんやおじさん達も子供達も何かやりましたね。みんなが、もう日本列島それぞれの家庭がみんな、同じようなことをして生きるために精一杯でした。

Ⅲ 宣教師の活動

敗戦直後の東京の駅前の様子は、刺激的な写真いわゆる原爆の悲惨な写真が、これは背景には共産党の人たちの活動としてなされていたんですね、米国に対する日本人の感情を怒りに駆り立てるように、そういうムーブメントとしての活動、どこに行ってもそれが貼ってありました。それと同時に米国から、もう本当に数えきれないほどの宣教師が日本列島を覆いました。日本の津々浦々に。ダイナミックスピーカーという、拡声器に関心のある人にとってはたまらないスピーカーがあつて。パイオニアという音響会社を作った松本さんは、そのダイナミックスピーカーを分解して、そして自分の手で新しいスピーカーを作って、音響のパイオニアという会社を作ったんですね。そのくらい刺激的なものでした。宣教師の活動は目覚ましいものでした。だからここ春日部でも例えば宣教師が東口に住んでおられたんですけれども、みんなほとんどその頃の若い者たち子供達は、その宣教師を

知ってます、宣教師に招かれています。クッキーが食べられるからです。クッキーなんて、そんなハイカラなもの子供の口には入りませんでした。だから教会にも人が来たんだけど、なんかサーっといなくなりましたね。これは何故かってことは考えるべきです。そして、まあ僕がアメリカ鼻眞になったのは、ハーシーのチョコレートで米国の軍人に会うともらえたんです。たまにはタバコも子供にもくれましたね。そのハーシーのチョコレートのおいしいこと。もうアメリカは敵だったんだけど、もう敵じゃないですよ。もう優しいおじさん、おいしいチョコレートのある国。今この頃になってね、アメリカの騙しのテクニックを、私は知ってしまったんですね。僕たちの食べているハーシーのチョコレートは、不純物だらけだったそうです。だから兵隊さんが食べてたのは純粹のハーシーのチョコレートで、僕たちが食べたのは、彼らが食べないところです。それは、ハーシーの会社に行って僕は分かったのです。

IV 敗戦後の日本

G H Qという進駐軍の総司令部があって、その司令部の特別許可を持っている宣教師達は、本当に派手にダイナミックに働いておりました。それは共産主義を日本列島に入らせないための、米国の支配方法だったんですね。だからまあそういう言い方は注意しなければならないにしても、米国の教会は熱心に宣教師を送ったんですけれども、実は米国という国に操られていた部分もありました。日米安保条約というのが批准されて今日に至って、日本列島もそこここに、東京にもあるんですよ、米軍基地は。75年経ってるのに、かつて戦った米兵が私たちの国を蹂躪してるんですよ。あの基地は米国なんですよ。私はいまだに、変だよなって思っています。そしてその安保条約に基づいて、日本の今の政府は、核兵器を拡散してはいけないという不拡散条約に調印しないです。今日は、長崎の平和を祈る日です。長崎では誰一人としてこの核兵器の不拡散条約に反対している者はありません。でも安倍首相は記念式典に行ったとしてもそれに触れません。なぜならば安保条約という条約のもとに、私たち日本人は（私を含めて）、米国の軍隊の傘の中に核兵器の中に守られてるんです。だからそう簡単に安倍総理はサインが出来ない。だから75年経ってもまだ傷ついてるんですよ。僕は痛みを感じ続けてるんです。

V 神の賜物

そして約 50 年近くこの教会の牧会をさせて頂いてきました。2020 年の 8 月 9 日のこ

の礼拝において、「慰めよ、慰めよ、」と繰り返して語ってくださる神様の御声を聞いています。75年前は東南アジアの諸国に日本の軍隊は出て行き、アメリカのハワイのパールハーバーにも直接アタックして、そして米軍基地を破壊したことが太平洋戦争の始まりと言われておりますけれども、大勢の人たちが死んで殺されて傷ついて、いや傷つけられて、敗戦の時の日本の状況は皆さんがこの広島、長崎のあの惨事の様子をニュースなどで見てご存知の通りです。『憲法9条』っていうのは僕は神様からの、平和の神様からの、愚かなことをしてしまった後の日本人に対する賜物だと信じています。もう戦争はしない、兵器は持たない、軍隊を持たない、よその国に出て行って戦いはしない。この憲法9条に守られるかのように、実は今までの日本の歴史にない、平和の75年間をずっと日本人は享受してくることができたのです。東西冷戦という時代に本当に危機的な状態がありましたけれども、その時も日本はどこにも軍隊を出しませんでした。ベトナム戦争にも参加しませんでした。今、米中の冷戦が非常に厳しく行われています。

私の小学校5年生の頃ビニールが世間に出始めて、面白いもんだなあって興味深くビニールを手にしていたことを忘れていません。それが今やプラスチックなどは自然界を破壊する汚染の根源になっている。経済成長が日本の豊かさが、本当に敗戦75年経て、私達は本当に安らかな平和な家庭が築けるようになった、と言えますか。あなたのお子さんや子供達をどのように教育したらいいのですか。けれども敢えて言います。そういう愚かさの中で、75年を経てもなお欲望に欲望を膨らませて、日本はあまり神様の前に賢いというような生き方をしてこなかったように私は思えてならない。でもです、ここ大切、寝てる人今目を覚ましてよ。でもです。神様はこの日本を愛して、にもかかわらず守っていて下さる。それがイザヤ書の冒頭の「慰めよ、慰めよ、」という父なる神様の御愛です。無益な苦役は終わって、その戦争の罪咎は、神ご自身が日本人に代わって背負ってくださり、重ね重ねの罰を受けるべきであるはずなのに、今私たちはこうして静かに敗戦記念礼拝を守らせて頂いております。それはここに神様の祝福が届いている、確かに一人一人に神様の守りが、私にあったように、皆様一人一人の今もこれからも、死ぬまで御手があなたの上に置かれているということです。だから私の人生の80年を振り返る時に、私は自覚してか自覚しないでか、確かに神様の慰めの祝福の中で生きてきて、その証を今日させていただいているんだっていうことも明確に語るができます。神様は臨在されてこの日本を、日本だけではなくて全世界を、コロナの不安と恐れの中にある人々にさえも、慰めのメッ

セージを届けていてくださるのが今朝の礼拝です。

VI 荒野で叫ぶ者の声

3節。「荒野で叫ぶ者の声がある。『主の道を用意せよ。荒地で私たちの神のために、大路をまっすぐにせよ。』」との御声です。神のために大路をまっすぐにせよというね。この荒れ果てたこの日本に。

実はこのみことばは、ユダヤ民族が南北王国時代にバビロンから攻められて、バビロンの奴隷のように、捕囚と言われていますが、捕囚になって、王侯貴族や宦官たち主だった人たちは連れて行かれるんですね。で、連れて行かれなかった者と、ペルシャのほうから来たその人達の国が出来て、そして混血児達がそこにあって、それなりの国家が、国が成り立ったのがサマリヤの国。だからイエスさまの時代は、すごい偏見があったじゃないですか。ユダヤ人とサマリヤ人の関係、それは歴史的な中でおこったんですね。日本においてもそれはあったし、米国に結婚して移った日本人の方々は、米国ですごく差別を受けているということですよね。ユダヤの人達は、国を失われて、そして遠くバビロンに連れて行かれて、神様の時がきて、慰めの時がきて、帰ってくる。行きも帰りも、荒れ地です。大変な道を連れて行かれ、また戻ってこなければならなかった。そういう歴史をふまえて私達は今朝の礼拝を守っているのです。

時空を超えて私達は、新しく荒野で叫ぶ者の声を聞きたいと思います。私どもが戦争に加担しない一人の人格者として生きるために必要なのは、神様に対する敬虔な、純粹な、神様を真実に礼拝する礼拝者としての信仰です。理屈ではない、神学ではない、哲学ではない。道筋を順序立てるそういう説教でもない。何が大切かと言ったら、今日まで 75 年間、この私たちの国を守り続けてくださった神様、この主なる神に、敬虔に従うということが、今朝の礼拝で一番守られていなければならない信仰です。

旧約聖書と新約聖書の間には 400 年の中間時代と言われる時代があるんですね。これはユダヤ人にとってはもう悲しみの時代。混乱の時代、思い出したくもないような時代。私たちはこの時代のことを冷静に学ぼうとすると頭が混乱するぐらい、あのユダヤ人の地は悲惨な時代でした。その時代のただ中に神のひとり子、贖い主、イエスキリストはおいでになったということ、マタイによる福音書は私たちに伝えているでしょ。しかもご丁寧に

ユダヤ人の系図を追いながら。私たちにこういう時代の只中に、真実間違いのないまっすぐな道が示されているんだと福音書は語りますね。この叫ぶ者の声という言葉がね 3 節と 6 節と 9 節に三回、聖書で同じ言葉を使う時は、すごく重要なことを私たちに伝えようとするときの一つの書き方なんですね、形式なんです。そして叫ぶ者とは、とどのつまりはマタイが冒頭で語っているように、バプテスマのヨハネこそ、荒野で叫ぶ者の声だと証しています。

しかしイザヤが預言しているその荒野をまっすぐにせよとの、その声とは誰か。キリストを信じて、キリストのご命令に従って、御父と御子と聖霊の名によって洗礼を受けた私達は、その声の発信がどこから、その道が誰によってまっすぐにされるかを知っています。声は、姿が見えません。形を表すことはできません。けれども真の声は、父なる神様の御心を表現することのできる人として、私達のところに来てくださいました。これが聖書の奥義です。

VII 教会の使命

今日、この教会が荒野で叫ぶ者の声を聞き、“あなた方がこの時代の声となりなさい、その声としての使命を果たすように ” という使命をはっきりと受け止める敗戦記念礼拝でありたいと願っています。私たちが住んでいるこの日本列島には、同じ日本人といえどもその宗教において、文化において、慣習において、考え方において違いがあります。そういう中に一つの姿として春日部福音自由教会があります。異なる宗教者、異なる価値観を持っている人たちに対して、真の声としてその道を示すためにはどうしたらいいんですか？ 神、罪、救いという重要教理を一方向的に順序を追って語ることによって、どれだけ心ある日本人をイエスキリストから遠ざけてしまったか。こういう過ちを、私はかつて犯しました。すなわち独りよがりの自己義認の、罪みれのキリスト者は証し人にはなっていないんです。人をキリストから遠ざける存在にしかなくなってしまったら、災いじゃないですか。大丈夫ですか？ だから神学的に哲学的に論破すること以上に大切なことがあります。荒野で苦勞している方々と共に苦勞して、その中に入って共に生きるキリスト者として、私たちはそれをこれからの教会の姿として表していく以外に、宣教の道は、証しの道は、神様の栄光の道は表されません。日本人キリスト者として、私が今朝強調したい大切な位格、それは父なる神様の憐れみ、御子イエス様のあがないによる赦し、聖霊なる神様のたゆむことのない私たちに対する助け主としてのとりなし。その神様の御顔を私た

ちがいつも拝してお従います。これが敗戦後 75 年を経て神様の憐れみを頂いてきた私たちの責任です。その責任とは？ 本当に今も生きて私達を守り助けてくださっているお方を、身近な人にどうしたらいいんでしょう？ 身近な人にどう伝えたらいいんでしょう？ どう語ったらいいんでしょうか？

私たちの生き方そのものが問われているのです。本当にイエスキリストに、“生涯を通して従う覚悟やいかに”と問われているのです。私は、神学とか哲学を軽視するものではありません。私はその学びが足りないものです。また神様の臨在をあがめる証し人を強調するからといって、神秘主義的なカリスマ的な信仰を支持しているわけでもありません。教会は、その地域社会とつながり、その地域社会で生かされているように、私たちはその地域社会の奉仕者として、自らを犠牲にして生きていくということが、敗戦 75 年を踏まえたこの教会の責任です。私はね、本当に 75 年経ってね、教会もキリスト者も含めてね、私の中にさえも、自分が幸せならそれでいいじゃねえかっていうね、てめえ勝手な生き方が見えるんですよ。それが、我慢できないんだ。イエス様の大嫌いなパリサイ人、サドカイ派の人々、律法学者たちがなんと多いことか。と思わずにはいられない。

VIII 主の臨在の表現者として

だからこの敗戦記念礼拝において、私たちは神様の臨在を本当に覚えて、どんな所にあっても、“神は我らと共に在り”というその信仰の、表現者でありたいと祈るわけです。牧師の方、執事の方々、教会員の人々。これからの日常生活のあり方そのものが、この「慰めよ、慰めよ、主の道を備えよ」というおことばの中に、御心は語られているのです。私たちの神様は創造者なるお方です。永遠なるお方です。御子は、その父なる神様のご命令に従って、私たちに人としてどう生きるべきかを証ししてくださいました。私たちは、御父の憐れみ、御子の贖い、御霊のとりなしの中に守られている者として、他の人々も同じように守られているんだ、という信仰を頂いて関わっていかなければならないのです。自分が洗礼を受けて教会に来て、祈る、礼拝をささげるようになったからと言って、いい気になっていたらそれはもう信仰を失っているようなものです。いい気になるなって言うんです。自分の本当の姿を知りなさいと言うんです。

実は先ほどもちらっと言ったんですが、この道は私たちの贖い主、主イエスキリストによって大路は作られているんですよ。「わたしが道であり、真理であり、いのちである。」と主は宣言して、私たちは守られている。“この大路を歩め”というおことばを明確に聞

いているのです。したがって今朝この礼拝を通して、ともに荒野に行く全ての全世界の人々と共に、私たちは、「慰めよ、慰めよ、」と言う主なる神様の御声を聞いて励まされて、その神様のぬくもりを感じ取って生活をして参りたいと思います。イエスキリストの平和の道、永遠の道を、忍耐深く大胆に表現する表現者として召されているのが、私たちの教会であり、主イエスキリストの集まり、教会です。

天の父なる神様。75年の大きなあわれみと癒やしと慰めを感謝いたします。この教会がイエスキリストのしもべの群れとして、この春日部の地で、あなたに仕えるように、仕えていくことができますように。自己中心の、小市民的な生き方を自ら脱ぎ捨てて、自分を捨て自分の十字架を背負ってお従いする群れとさせてください。主イエスキリストの御名によってお祈りをおささげします。アーメン